

# 外国との付き合い方に 思うこと



荒谷 卓  
(弘前・会員)

外国との付き合い合いにおいて、個人同士（文化団体等もこの範囲に含む）の友好関係は正直、誠実、親切、寛大等によって保たれるが、国家間の

付き合い（外交、通商、戦争等の行動原理）は利害関係の均衡であり、国家間を規制するものは利害関係を貫く力である。

日本人は幕末に至るまでの二千年間、日常生活において日本の外の世界を意識する必要がなかった。これは世界でも類希なる国であり、四周が海に囲まれているという地理的環境によるところが大きい。このため隣国との毎日のいざこざは明らか、侵略・征服を警戒する必要がなかった。同時に外界（外国）に向かって対決する意識も養われなかった。

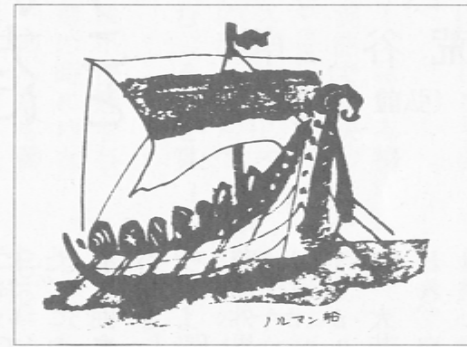
しかし大陸国家、特にヨーロッパ諸国の人々は、大昔から侵入や征服によって民族の文化が失われ、自主独立が踏み躪られるという地理的条件の中に住んできたので、外に向かっては警戒の目を光らせ、内部では自分達を守る言い分を通す方法を考え続け、たとえ摩擦がなくとも外界への敵愾心、攻撃心はすてない。それは何も悪いことでもなければ、友好関係を妨げることもない。決

して自分が損をしないように、常に何かを得るよう  
に戦略を練り、それを貫くことは友好関係と立  
派に併存するのである。

ああだこうだと美しい言葉で自己正当化を押し  
進めながら、自分を通していかな  
ければ亡びてしまう社会である。

決して腹を割ったり、すべてを水  
に流して謝るような真似はしな  
い。食うか食われるかの緊迫関係  
の中で生きねばならぬ地理的条件  
が、日本人とは全く異なる外界へ  
の意識を形作ったのである。

たとえば、イギリスは日本と同  
じ島国であるが、泳いで渡れる海  
であり、イギリス人の歴史的体験  
は日本人と大いに異なる。日本で聖徳太子が「和  
をもって尊しとする」と述べていたころ、イギリ  
スではそれまで住んでいたケルト族が大陸から侵  
入してきたアングロサクソンにより殺戮され、生



き残りはアイルランドに追いやられている。アン  
グロサクソンがブリテン島を支配するようになっ  
てしばらくすると、スカンジナビア半島からバイ  
キングがやってきて約二百年間、掠奪、破壊、暴

行、殺戮を続けイギリスの隅々まで荒  
らしまわったが、アングロサクソンを  
根絶やしにするには至らなかつた。

その頃日本では、平安京をつくり、  
朱雀大路を大宮人（都の人）が散策し  
ていた。その後日本では平等院の鳳凰  
堂が完成し、かな文学の傑作が次々に  
生まれていたが、イギリスではノルマ  
ン人の征服が遂行された。大陸からノ  
ルマン人が大侵入し戦争となり、王を  
はじめ支配階級はすべて殺され、イギ  
リスはノルマンの支配下になった。

民族の大混血、言語の大混合が起き、ノルマン  
人による征服が完成した。その後もイギリス人の  
外界に対する警戒心は研ぎ澄まされ、外からやっ

て来る人間に対し不信の念を欠かさなかつた。

今日、国際社会を動かす方法や手段は、長い歴  
史を通じてまずヨーロッパで培われたものであり、  
後にアメリカに移植され、アメリカにおいて益々  
多様に培養された。このような欧米人の歴史的体  
験知より出た厳しい国際社会のルールは、お人好  
しの日本人には分かつたように分らない異質性  
を秘めている。

日本人は、対敵行為だの、警戒心だのという物  
騒な意識を常に自分のものにするには苦手であ  
る。それどころか、最近流行の国際親善等という  
言葉に代表される国際社会を、日本という安全地  
帯の延長のごとく考え、善意をもって当たれば世  
界の国々は善意をもって返答してくれるのだと思  
いこんでいる。

しかし、実際の国際社会は、対決姿勢を基調と  
した、利害関係の駆け引きの場であり、外界に対  
する猜疑心、不信の念、警戒心、そこから出てく  
る打算、駆け引き、脅迫が国と国との付き合い、

即ち外交である。

日本では、外国に対する国家としての謝罪が最  
近目立つようになったが、これによって国家間の  
良好な環境の醸成に役立つと考えられているふし  
がある。しかし、外交上の環境醸成とは政治的に  
は極めて不確実な領域であり、その先の明確な目  
標（利益）を睨んでいてこそ意味のあるものであ  
る。

過去のできごとを国として非を認め謝罪するこ  
とから得られるのは、お互いの友好と親善ではな  
く、さらなる恐喝と政治的醸成を強要できるチャ  
ンスを与える場合もあり得る（しかし、それだと  
て、それによって国民が受ける自己嫌悪あるいは  
自虐的な精神面の影響は重大である）。

国家間の付き合いにおいて、謝罪によって相手  
国の情に訴えるなどという方程式はあり得ない。  
繰り返すが、国家間の付き合いは、あくまで国益  
追求が基本で、利害関係の打算と均衡の上に成り  
立つものである。